エゾシャクナゲとエゾムラサキツツジの山取りのしかた

田端喜久二

観賞用としてシャクナゲ・ツツジ類の植栽がますます盛んになって，山取りすることも多くなってきた。国有林でも林内に自生しているシャクナゲを民間に払い下げ，地元民の要望にこたえるようになったところもある。しかしこれらの山取りしたものを庭などに植えた場合，活着率がきわめて悪いのが実状である。自然にはえている美しい木を堀取ってきても，枯らして捨てることはまことに惜しいことである。これらの枯死した原因を調べると、堀取りから植付までの取扱いや，管理に不備の点が見受けられるので，その扱いについて述べることにする。

山取りの適期

北海道では春と秋がよく，春は4月下旬から6月上旬頃まで，自生地の土壌が凍結からとけた頃から新芽の開じょまでがよい。また秋は9月下旬頃から10月下旬までが適期である。

堀取りのしかた

シャクナゲ・ツツジの性質はともに細根性かつ浅根性であり，シャクナゲは半日陰になるような日照程度のところで，湿度の高い土壌を好み，滞水のある過湿地はきらい，さらに通気・通水性のよい土壌が好ましい。ツツジは自生地の環境から推察してみても，日当りのよい所でもよく育ち，湿度はシャクナゲよりも要求度は少ないようである。山取りにあたっては，上記のような諸性質をわきまえて取扱いをする必要がある。

山取りに携行する用具として唐グワ・腰ノコギリ・剪定バサミ・スコップなどで梱包材料としては，ムシロ・ナワなどがある。わずかばかりの採取であれば，もっと気軽に考えて，根を堀りおこすための小スコップ，採取した木の根を乾燥させないための水ゴケと包んで持帰るためのビニール・ヒモぐらいを用意すればよい。

シャクナゲ・ツツジの自生地は叢生している場合が多いが，そのどれもが庭木などに適しているものではないから，選木にあたっては次を基準にすると良い。

1．幹が太くて木丈の低いもの。

2．木ぶりや枝ぶりのよいもの。

3．枝が多く葉が密についているもの，葉性のよいもの。

4．幹や葉が病虫害などで弱ったり，いたんでいないもの。

シャクナゲ・ツツジは雑木などと混生している場合が多い。根もこれらの樹木の根と交錯している。堀取りにあたっては，支障となる雑木や倒木などを取除いてから堀取りに着手する。またこれらは空間を求めて伸長する性質があるので幹が匍匐して，それより発根したものをよ

くみかける。その状態を写真に示した。根元の近くで堀取ると，太い根の部分が切断され，肝心の細根を切り落す結果となる。堀取りにあたって最も重要なことは，この細根をつけて堀取ることで，先ず根の配置を確かめ，太い根の先についているヒゲ根をつけるように，大事に堀取りしなければならない。太い根の部分を持って引抜くようなことはさけるべきである。大きい木になると地上部の樹冠に相当する根を張っているので，堀取りにあたってはこのことも十分考慮して，大きく堀取る必要がある。山取り木の植栽後枯死したものを調べてみると，太い根だけで，細根をつけていないものがほとんどである。堀取ったものはただちに根をぬれ莚などでおおい，乾燥を防ぐようにする。植付ける場所までの輸送にあたっても，根の乾燥を防ぐように梱包する。エゾムラサキツツジは胴ぶき（幹の中部より下の部分から不定芽が生じて伸長する）が旺盛であるから、堀取る前年の春かまたはそれ以前に腰高のものや，樹姿のよくないものは幹や枝を切りつめておくと恰好のよいものをつくることができる。また堀取りや輸送などの作業も容易となる。大きい木をねらうよりも，二三年辛抱するつもりで，小さめのものをねらう方が，活着が容易であるし，その後の生育も比較的早く，植栽地に順応する。

植付のしかた

山取り木の根は，傷めないように念入りに，完全に根を堀りとったと思っても一部の根は切りはなされていて，根からの水分の吸収が充分でなく吸水と蒸発のバランスがくずれて枯死してしまうことがある。枯れないまでも，のちのちの発育にひびいてくるので，思い切って上部を切り詰めた方がよい。

エゾムラサキツツジについては，胴ぶきが旺盛であるから，木によっては幹を切りつめることも一つの方法である。

山取りしたものを直ちに庭などに定植することは無理がかかるので，一度畑などに仮植して１－２年位養成して樹勢を回復させてから定植するとよい。定植にあたっては根の深さは自生していたときの深さとし深植えとならないように留意する。

エゾムラサキツツジ(写真上)とエゾシャクナゲ(下)の幹が胴伸して発根している状態

1．植付場所

シャクナゲは本来湿度の高い土地を好むから植付場所の選定には，十分気をつかう必要がある。傾斜地で砂質土の乾燥し易いところなどは好ましくない。また半日陰のところを好むので，そのような木陰のところに仮植し畑地などに植える場合は，よしずまたは寒冷紗で日覆をする。ツツジは植付後活着するまでは，日覆を必要とするが，その後は取除いて直接日光にあててよい。

2．土質と植穴

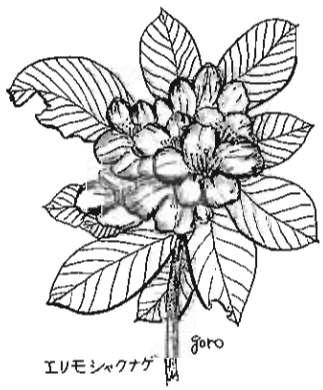
土質は腐植質に富み，排水がよく，保水力のある土質が好ましい。壌土ならよいが，粘土質の土壌は固まって，細根が土壌中に容易に伸びられないのでよくない。

植穴は植える木の根の部分がゆったりとはいる程度に余裕をもった大きさとし，埋土は完熟堆肥などを混じた壌土を使用すると活着後の生育がよくなる。粘土質のところはさらに大き目の穴を堀り，埋土は堆肥のほかに土壌改良剤として火山砂・ピートモスなどをまぜた土を用いる。

3．灌水

堀取りにより根をいためているので，根からの吸水と，葉からの蒸散作用との間に，アンバランスがおきて水分が不足しがちなので，植付後1週間か10日ぐらいは根元に十分灌水をつづける。以降も乾燥の著しいときは灌水する。シャクナゲは水分が不足すると，葉が裏側に巻いて知らせてくれる。このような状態になったなら，葉水とともに根元に十分に灌水する。土の乾燥を防ぐには，ワラ・コモなどを根もとに広く敷くとよく，薄いコモ一枚でも水分の蒸発はかなり防げるものである。

（樹芸樹木科）



エリモシャクナゲ